

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 2 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24720275

研究課題名(和文) 英語熟達度とコミュニケーション能力一般の関係の検討：大学英語を事例とした基礎研究

研究課題名(英文) A Consideration of Relationships between English Proficiency and Communication Competence in General: A Case Study at University Level

研究代表者

山中 司 (Yamanaka, Tsukasa)

立命館大学・生命科学部・准教授

研究者番号：30524467

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円、(間接経費) 300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究を通し、理論的立脚点として、D. Davidsonが論文"A Nice Derangement of Epitaphs"(以後NDEと表記)にて論じた「言語の死亡宣告」(戸田山, 2002)について考察した。Davidsonは日常言語の実態を鋭く描いており、英語教育論的含意を探ることには一定の意義がある。本研究はNDEを大学英語教育の文脈で読み替え、既存の評価論パラダイムの限界を理論的に検討した。汎用化に耐え得る評価可能性を否定する代替案として、プラグマティズムに立脚した新たなパラダイムを模索した。評価の「無力化」と「実用化」に向けての研究は今後の継続研究課題とし、理論的思索を深めたい。

研究成果の概要(英文)：Throughout the period of the research, it has discussed the limitation of language media by considering the article titled "A Nice Derangement of Epitaphs (hereafter NDE)". Since it describes the picture of ordinary language sharply, it has profound significance to ponder its implication at the area of University English education. It reinterpreted NDE in the context of English education, and discussed its circumscription of the paradigm in existing evaluation theory. As an alternative, it explored a new paradigm and model of evaluation based on the philosophy of pragmatism.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：プロジェクト 大学英語教育 プロジェクト発信型英語プログラム プラグマティズム 評価論 コミュニケーション 英語熟達度 メディア

1. 研究開始当初の背景

英語教育分野において「コミュニケーション能力/communicative competence」という概念が提示されて久しいが、未だこの用語に対する十全な説明及び解明は成し遂げられていない。またそれに伴った評価の問題、すなわち「コミュニケーションをどう評価するのか」という点については難問として残されたままである。しかしながらコミュニケーションを重視し、それを全面に出した英語教育が求められる社会的潮流の中、英語教育の現場で個々の教員がコミュニケーション能力を何らかの形で説明し、妥当で適切な評価が求められていることもまた事実であろう。

第二言語習得研究の分野では、Hymes(1974)以来、狭い言語観、文法論から脱却し、広義の言語コミュニケーション観の確立を目指し、それが取り扱うべき裾野を拡げてきた。ところが言語コミュニケーションの構成要素の立証が困難であることが種々明らかにされる中、communicative competence の議論は、再び言語的要素に特化した狭義のスコープに逆戻りしつつあるように思われる。

2. 研究の目的

本研究では、大学英語教育におけるコミュニケーション能力の解明のため、言語的熟達度がコミュニケーション能力を推計する有効な物差しとなり得るかどうかが検討した。また本研究は「コミュニケーション能力」を「言語コミュニケーション能力」に限定せずあくまで広義に捉えた。このことにより既存の研究にはない視点が得られたと考えたい。コミュニケーション重視の大学英語教育が言語メディアだけを評価するのは矛盾であるとすらいえ、言語をコミュニケーション活動のあくまで一部として捉え、非言語表現をふんだんに用いた活動全体をコミュニケーションとして評価することが適切であり、それを遂行する能力(competence)こそが「コミュニケーション能力(communicative competence)」でなければならない。既存の応用言語学研究が言語至上主義的傾向を持つことはすでに多くの批判があり、現状、英語教育評価はこの点に強く束縛されていることは否めない。

本研究は言語コミュニケーションではない、コミュニケーション能力そのものの評価という観点において、独自の貢献を目指すものであった。

3. 研究の方法

本研究は既存の第二言語習得研究が捉えてきた言語観やそれに基づく評価の枠組みを拡張し、コミュニケーション活動全般を捉えた評価モデルの構築を試みる点で独自性がある。また言語熟達度がコミュニケーション能力の指標となり得るかについて、実践データに基づく検討を行うことは、コミュニケ

ーション能力解明のための示唆を提供し得る。以下本研究が扱った具体的項目について個別に記述する。

・先行研究の限界点の整理

コミュニケーション能力については第二言語習得研究分野で幅広く調査・研究がすでに行われてきており、それら国内外の成果を整理し、課題点を検討した。

・理論パラダイムの検討

communicative competence モデルについては、社会言語学、応用言語学、第二言語習得研究分野ですでに数多くのモデルが提示され、概念やコンポーネントも変遷を辿ってきた。本研究ではこれらの既存モデルを比較検討し、本件研究が理論パラダイムとする広義のコミュニケーション観を反映できる理論の模索を行った。

・独自調査(参与観察)

一般に認識されていると考えられるコミュニケーション能力と言語的熟達度との関連性について、研究代表者が教員として担当する大学英語クラス(立命館大学生命科学部、薬学部1年生、2年生、3年生)の参与観察を行い、学習者が持つ認識について検討した。

・言語熟達度評価基準の検討

既存の言語能力評価指標として、広く実践されている TOEFL、TOEIC、GTEC、IELTS、ACTFL、英検等のテストを取り上げ、言語熟達度評価として、その中で持っても包括的なテストを選定、もしくはそれらの組み合わせを検討した。この際、既存モデルが十分に取り込めていない、言語パフォーマンスを拡張させる非言語の役割や熱意・態度などの情緒的、心理学的側面を組み入れた広義の言語熟達度評価基準を理論、実践の双方から模索した。

・コミュニケーション活動評価基準の検討

学習者のコミュニケーションを評価する指標として、プロジェクト発信型英語プログラムにおける英語授業での学生パフォーマンスを用いた。この際すでに理論的私信は鈴木(1997, 2003)に、具体的な実践評価指標は鈴木(1994, 2009, 2013)に示されており、本研究はこのクライテリアを踏襲した。

「プロジェクト発信型英語プログラム」とは、鈴木佑治、田中茂範らが慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス(SFC)にて開発、実践を行った英語教授法であり(詳細は鈴木 2003, 2009, 2010 等を参照)、現在は鈴木によって立命館大学生命科学部、薬学部、スポーツ健康科学部、大学院生命科学研究科にて実践が行われている。研究代表者自身も当実践にかつて学習者として参加し、現在は教員として関与している。

4. 研究成果

英語教育評価論は、コンピュータ導入による項目応答理論等の発達等も寄与することで、これまで目覚ましい発展を遂げてきた。妥当性、信頼性を担保し、個々人が持つ安定した英語能力の特質を抽出することを目標とし、これらに対しては限りなく達成に近づきつつあるといえよう。しかしながら、これらの評価論パラダイムの根本には、いわゆる「英語力」というものの存在が大前提にされており、そしてそれを評価・測定できるという想定に基づいている。本当に英語力は存在し、そしてそれらを検定できるのか、評価論におけるこれら根本問題の検討はこれまで十分になされてきたとはいえない。

本研究を通し、理論的立脚点として、D. Davidson が言語哲学における論文 "A Nice Derangement of Epitaphs" (以後 NDE と表記) にて論じた「言語の死亡宣告」(戸田山, 2002) について考察した。Davidson は哲学者や言語学者が想定する規約 (convention) に基づいた言語観をも大胆に否定するが、Davidson が論じるコミュニケーションが日常言語の実態を鋭く描いており、その英語教育論的含意を探ることには (英語教育がコミュニケーション重視に傾くならば) 一定の意義がある。また現行の英語教育の評価モデルは百花繚乱状態であり、それが測定する能力も多岐に亘っている。しかし不思議なことに、各評価間には一定の相関が見られ、いくつかの根本的な問題を孕んでいるにも関わらず、概ね学生達に受け入れられている傾向がある。本研究は NDE を大学英語教育の文脈で読み替え、既存の評価論パラダイムの限界を理論的に検討した。汎用化に耐え得る評価可能性を否定する代替案として、プラグマティズムに立脚した新たな評価論パラダイムの理論を模索した。最終的に「プラグマティック評価論」の輪郭を描いた。評価の「無力化」と「実用化」に向けての研究は今後の継続研究課題とし、理論的思索を深めたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

著者名: 近藤雪絵、山中 司、論文標題: 生命科学部・薬学部「プロジェクト発信型英語プログラム」における独自のプレイスメント評価モデル "English Test in Academic Context (e-TAC)" の実施について-成果と課題-、雑誌名: 立命館高等教育研究、査読: 有、巻: 14、発行年: 2014、ページ: 131-146

著者名: Tsukasa YAMANAKA、論文標題: Diversified Research Considerations of the Project-based English Program: An Overview from the Viewpoints of Institutional Theory, Communication

Philosophy, and its Evaluation Framework、雑誌名: Ritsumeikan Higher Educational Studies、査読: 有、巻: 13、発行年: 2013、ページ: 187-196、DOI: ISSN 1348-1193

[学会発表](計 3 件)

発表者名: Yuji Suzuki, Syuhei Kimura, Yukie Kondo, Tsukasa Yamanaka、発表標題: How to incorporate the most advanced multimedia technologies into writing services: Introducing the concept and practice of the English writing program at School of Life Sciences、学会名等: Writing Research Across Borders Conference 2014、発表年月日: 2014年2月19日、発表場所: Paris, France (校務による欠席のため紹介のみ)

発表者名: 鈴木佑治、中村 修、山中 司、木村修平、発表標題: 慶應義塾大学 Open Research Forum 2013 セッション企画: ICTドリブンな英語教育の最前線 (プロジェクト発信型英語プログラム)、学会名等: 慶應義塾大学 Open Research Forum 2013、発表年月日: 2013年11月23日、発表場所: 東京ミッドタウン&カンファレンス(東京都)

発表者名: Tsukasa Yamanaka, Syuhei Kimura, Yuji Suzuki、発表標題: The Impact of Feedback from Online Software on Revisions in Academic Writing Courses: A Case of Project-Based English Program at Ritsumeikan University (BKC)、学会名等: Academic Writing in a Changing World: Second International Conference on Academic Writing、発表年月日: 2012年8月1日、発表場所: Tel Aviv, Israel

[図書](計 2 件)

著者名: 鈴木佑治、出版社名: 南雲堂、書名: プロジェクト発信型英語 Do Your Own Project In English Volume 2、発行年: 2014、総ページ数: 165、(山中 司)は企画・構成・編集補佐)

著者名: 鈴木佑治、出版社名: 南雲堂、書名: プロジェクト発信型英語 Do Your Own Project In English Volume 1、発行年: 2013、総ページ数: 152、(山中 司)は企画・構成・編集補佐)

[産業財産権]

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

[その他]

ホームページ等

<https://www.facebook.com/ProjectBasedEnglishProgram>
(共同管理 Facebook サイト)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

山中 司 (YAMANAKA TSUKASA)
立命館大学・生命科学部・准教授
研究者番号：30524467

(2)研究分担者 なし